

春かけてまつちの山のかひ有て霞む雲井に初音をぞきく
ふりにけるうぐひすの音に今はとて啼や彌生のやま郭公
ゆく春をなれもをしとや郭公まだきや彌生空に鳴くらん
一、三月盡

暮てゆく春の雲井を飛鳥のつばさ求めてとどめてやみん
詠めつゝ春の名残を思ふまにこゝろ強くも暮るゝ空かな
一、更衣の意を

山の端にきのふの春をしたへどもこす捲く袖は蟬の羽衣
心にもあらでぞかへつ夏衣きのふの春をおもかけにして
歸りつる春の別れをおもふ身は今日とて花の衣かへめや
深山路の露の玉笹今朝わけてかへりし春を誰かとふらん
夏衣春のわかれをわきて思ふ今朝しもなか更初めけん
一、山本基庸に染筆を望む

卯月九日。基庸へ染筆の儀令厚望一卷昨日落手。所寫の
和歌は、予常至感之餘、今抄出一帖の内より七首所撰出し、
今日謝申遣とて。

水くきの清き流れにうつせばやことばの花の色も一しほ
忘れずばいかで訪まし松の門門をたがへて人のきぬらん

一、述懐といへる事を
世の中に見しに聞きしに様々に移る心のあればこそあれ
思ひあへず歎く心のはかなさも憂世と厭ふ數ならぬかは
世の憂に思ひし山をよそにして過行く空をうち嘆きつゝ
一、菊池武康旅行の詠

十四日。菊池武康旅行の詠を寫置きぬ。
越中の國立山に雪の残るを見て

たち山の雪を横ざる霞かな
信州室飯の山中に、彌生の廿日餘櫻のさかりなれば。

遅櫻今を春邊の山路かな
姨捨山のふもと、咲残れるはな所々に見えて、霞渡た
る風景いはん方なし。

月をいかに花になぐさむ旅の道
浅間山さだかにて、立のぼる烟絶えせねば。

浅間山もゆる煙の代々を経て久しく絶えぬためし成らし
武州熊谷の堤のほとり、杜鵑の初音を聞て。
春はをし暮すばきかじ郭公

又

名残問ふ春をおもふやほととぎす

一、郭公の詠

十七日。昨日郭公の詠。

ほととぎす過こし里の名残さへ思ひやらるゝ夜半の一聲

水上秋望

此題非當年といへども古今の序に、ながらの露もつくと聞えはとあるを
以て思ひよる也。同集伊勢の歌「なにはなる長柄のはしもつくるなり今は
我身をなにいたと
へむ」とも有之。

さらにまた長柄の桶の朽はてゝ夕霧わたりあき風ぞ吹く

一、孟浩然の詩の意を

孟浩然送友詩。

君登青雲去。予望青山歸。雲山從此隔。淚濕薜蘿衣。

この心を

雲にゆきやまを隔てゝかへるさの袖よりほかも露の玉笹
一、隅田川の古歌を見て

五月二日。隅田川へゆきける人の、むかしより此渡りをよ
める歌どもを、寫し來て見せられ侍りしを返しつかはすと
て、包紙に書付侍りける。

あはれ世に残ること葉の花鳥の跡しのばるゝ隅田川かな

夏山を

あしびきの山の山の雫に枝たれてみゆるばかりにしげる柏木

一、端午旅宿菖蒲

あやめ草くさの枕にひきそへて結ぶ間もなき夏の夜の夢
笹の屋の一夜計の宿りにはけふの菖蒲をふくとしもなし
露ながらいざかけ添むあやめ草旅の袂のぬれぬものは

一、四辻中將殿参向

四辻中將殿比日参向被成候に付、以御使者蹴鞠三十首の
和歌・職人歌合、各古本御進贈有之候。

待郭公

いとやすくぬぬ夜つもれど郭公待に心のよはりもやす

五月雨

みなと田の早苗も波にくちぬらん賤が心やさみだれの空
夜 橋

夢さめてむかしをかへす袖のつゆはな橋の風やふれけん
むかしおもふ山のはつかの月影に木のしたくらき庭の橋
水 鶏

短夜もあかし兼てや天の戸をひとり水鶏の叩くなるらん